

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：82621

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24300315

研究課題名(和文)美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Developments of Art Appreciation Programs Utilizing Collections of museums

## 研究代表者

一條 彰子 (Ichijo, Akiko)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員

研究者番号：40321559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,500,000円

研究成果の概要(和文)：国内外の主要美術館で行われている鑑賞教育のスクールプログラムについて調査し、米国と豪州から教育責任者を招聘してシンポジウムやワークショップを4回開催、海外の先進的事例を日本に紹介した。また、国立美術館と博物館の所蔵作品49点から、小・中学生の発達段階にあわせて作品を選べるウェブプログラム「鑑賞教育キーワードmap」を開発して、学習指導要領に準じた鑑賞授業をどこでも行うことのできる環境を整えた。これらの成果は、美術科教育学会等で発表した。

研究成果の概要(英文)：This study surveyed art education programs for schoolchildren developed by major art museums in Japan and abroad, invited education supervisors from the USA and Australia, and held four events including symposia and workshops to introduce cutting-edge efforts abroad. In addition, Keyword Map for Art Appreciation Education, a web-based application helping teachers select works from 49 items from the collections of the national museums according to development stages of schoolchildren, was created to offer an environment where art education programs following the National Visual Arts Standard can be conducted anywhere. The results were presented at conferences including that of the Association of Art Education.

研究分野：美術館教育

 キーワード：美術館教育 鑑賞教育 学習指導要領 所蔵作品 鑑賞教材 ギャラリートーク スクールプログラム  
エデュケーター

## 1. 研究開始当初の背景

平成 20 年に文部科学省は学習指導要領を改訂し、「言語活動の充実」や「伝統と文化に関する教育」を重視した鑑賞指導を、「美術館との連携」や「文化財などの積極的活用」において行うよう明示した。また、同年改訂された博物館法でも、「博物館の教育機能の充実」は明確に方向づけられた。しかしながら当時の状況は、「学習指導要領によって学校の博物館利用が即されているものの、博物館がその期待に十分対応していない」(平成 22 年文化審議会)、「学校向けプログラムを開発するための指針や方法論が十分でない」「学校のカリキュラムと博物館教育の間に齟齬が見られる」(平成 22 年文化庁調査)という状況であった。

一方、本研究代表者らは、平成 18 年以降「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」の実施者として、全国の美術館学芸員や小・中学校教諭らと毎年接しており、鑑賞教育への関心は平成 10 年頃から急速に高まり、多種多様な実践が各地で試みられていること、しかしながら実践は散発的であり、作品や方法の選択については十分に研究・検討されていないこと、作品分野によっては鑑賞教育プログラム作りが難航しているものがあること等を認識していた。

これらのことから、現在国内外の美術館で行われている鑑賞教育の理論と方法を整理し、学習指導要領と連動した鑑賞プログラムを国立美術館・博物館の所蔵作品を用いて開発することで、全国の鑑賞教育を促進できると着想するにいたった。

## 2. 研究の目的

(1) 国内外の美術館・博物館で行われている鑑賞教育の理論と方法、プログラム内容、その地域の学習スタンダードとの関連性を調査・分析する。

(2) その結果を参照し、我が国の学習指導要領に基づく鑑賞教育の在り方と所蔵作品の活用方法を検討し、先駆的な鑑賞教育プログラムを構築する。

(3) これらの研究成果を公開し、実践的な鑑賞教育プログラムの提示を通して広く日本の教育現場と美術館・博物館に還元する。

## 3. 研究の方法

研究テーマが学校教育と博物館教育の両域に跨るため、分担者は教育担当学芸員による学芸チームと、教育学・教育政策の専門家による教科チームに分かれ、研究課題を双方の立場から究明した。

(1) 国内外の美術館・博物館のスクールプログラム(K-12、幼稚園から高校対象)を調査・分析する。

子どもへのギャラリートークの実見  
トーク・デモンストレーションの体験  
教育担当学芸員(エデュケーター)へのインタビュー(鑑賞教育の理念と方法、所

蔵作品との関係、学校連携の仕組み、学習スタンダードの反映、教員研修、組織、オンラインの活用、今後の目標)

学習スタンダードは日本の学習指導要領にあたる。米国ではスタンダード(市、州、全国共通)、豪州ではカリキュラム(全国共通)またはシラバス(州)。

(2) 国立美術館・博物館の所蔵作品による鑑賞教育プログラムを、学習指導要領に関連付けて開発する。

(3) 開発したプログラムを公開し、研究成果を広く還元する。

シンポジウム、ワークショップの開催  
ウェブによる公開  
学会、論文等による公開

## 4. 研究成果

### (1) 国内の美術館・博物館調査

まず手始めに、東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館、東京国立博物館で実施中の教育プログラムを、それぞれの所蔵作品の分野別に洗い出し、各館の特徴と傾向を把握した。概ね「対話による鑑賞」の考え方をベースに展開するも、所蔵作品の分野(時代や技法)によって、また展示状況によって、対象学年や方法(ギャラリートークやアクティビティ、ワークシート)に違いが生まれることを確認した。これらは後にウェブプログラム「鑑賞教育キーワード map」を作成する際の基礎資料となった。

### (2) 米国の美術館調査

グッゲンハイム美術館、ニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、ブルックリン美術館、ワシントン・ナショナル・ギャラリー、フリック・コレクション等の現地調査を行い、次の特徴を明らかにした。

#### 探求的な鑑賞

現在の鑑賞活動の主流は、inquiry based appreciation(探求的活動を基盤とした美術鑑賞 探求的な鑑賞)と呼ばれる、展示室での活動である。子ども自身による観察や発見、知識や経験、イメージや推理を原動力として進められる。活動の中心は、作品の前でファシリテータ(エデュケーターやボランティアによる)が子どもと相互的に語り合うギャラリートークであるが、子どもの年齢を考慮したアクティビティやゲームなどを組み合わせることもある。

探求的な鑑賞は、ジョン・デューイやハワード・ガードナーの教育哲学や、構成主義の学習者主体の考え方が基盤となっている。「一方的な解説」から「相互的な対話」への移行は、鑑賞教育におけるこの 20 年ほどの最も顕著な変化であり、日本もその影響を強く受けている。

#### 作品情報の伝え方

1980 年代に米国で開発され、日本でも「対話型鑑賞」として影響力を持つ VTS (Visual Thinking Strategies)は、今では数ある方法

のうちのひとつとしか扱われていないことを確認した。VTS では批判的思考力の育成のために最後まで作品情報を与えないが、探求的な鑑賞では、作品情報を厳選して与える。所蔵作品を通した美術文化への理解を使命とする美術館にとって、これはバランスのとれた判断であると言える。

#### 美術館と学校をつなぐテーマ

ギャラリートークで鑑賞する作品は、「コミュニティ」「アイデンティティ」「女性」などといった「テーマ」に沿って選ばれる。テーマはその地域の学習スタンダードを反映させて設定され、教員は子どもの年齢や授業目的に合わせてテーマを選択することができる。テーマによっては、社会、国語、外国語、科学、音楽、哲学など、美術科以外の教科で活用することも可能である。

#### 複数回授業

3回から6回程度、美術館に来館したりエデュケータが学校訪問したりする複数回プログラムが多くの美術館で行われている。経済的に、あるいは家庭環境など様々な困難な理由を持つ子どもを対象にした複数回プログラムもあり、学校教育への手厚いサポートとなっている。

#### 対応スタッフと教員研修

常勤のエデュケータ、有償のパートタイム・エデュケータ、無償のドーンセント、インターンなど、雇用形態や資格が異なる多くのスタッフがスクールプログラムに関わっている。

教員研修は、単発のレクチャー、単位の修得を含む美術史や学習理論の講義、ファシリテーション・スキルのトレーニング、授業案作成ワークショップなど多岐にわたる。このような研修があればこそ、教員は有効に美術館を利用することができている。

### (3) 豪州の美術館調査

ニューサウスウェールズ美術館、オーストラリア現代美術館、ヴィクトリア国立美術館、ハイディ近代美術館等の現地調査を行った。基本理念や教授法、テーマの設定、教員研修などについては米国とほぼ共通するが、豪州独自の特徴として次の3点が明らかになった。

#### 三つの優先事項

オーストラリアン・カリキュラム(全国共通の学習スタンダード)において、教科横断的に学ぶべき現代的課題とされている、「アボリジニ及びトレス海峡島嶼民の歴史と文化」、「アジアおよびアジアとのかかわり」、「サスティナビリティ(持続可能性)」の3事項が、スクールプログラムのテーマに反映されている。

#### 後期中等教育の充実

大学進学への予備課程として位置付けられている11・12年生(日本の高校2・3年生にあたる)のアート選択者に対して、手厚いスクールプログラムを行っている。

#### オンラインの活用

広大な土地を持つオーストラリアでは、遠隔地の学校に対するオンラインプログラムの構築に、喫緊の課題として取り組んでいる。

### (4) シンポジウムとワークショップ

研究3年目となる平成26年度に、4回の「コレクションと鑑賞教育」シリーズを開催し、研究成果を公開した。

シンポジウム「オーストラリアの美術館教育の現場から」(9月21日、国立西洋美術館講堂、140名、ゲスト：ヴィクトリア国立美術館教育部長ゲナ・パネビエンコ)

ワークショップ「グッゲンハイム美術館の鑑賞教育」(1月9日、東京国立近代美術館、エデュケータのみ対象25名、ゲスト：グッゲンハイム美術館教育部長シャロン・バフツキー)

シンポジウム「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育の展開」(1月10日、国立西洋美術館講堂、140名、ゲスト：シャロン・バフツキー)

ワークショップ「ホイットニー美術館のギャラリートーク」(3月12日、東京国立近代美術館所蔵品ギャラリー、エデュケータ・ボランティアガイド対象50名、ゲスト：ホイットニー美術館プログラムディレクター、ヘザー・マクソン)

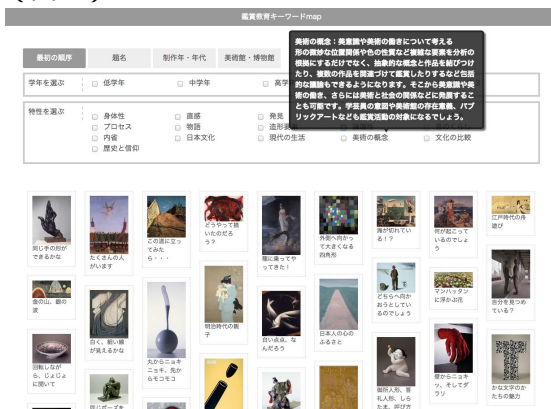
### (5) ウェブプログラムの開発

米豪の調査事例を参考に、日本の状況に照らし合わせて、パイロット・プログラム「鑑賞教育キーワード map」を開発し、ウェブ<http://kanshokyoiku.jp>上に公開した。主に小・中学校の教諭が、「どの学年に」「どの作品を」「どのように」鑑賞授業すればよいかを考えるためのサイトである。学習指導要領では、米豪の学習スタンダードにあるような具体的な学習テーマが示されていないため、それに代わって発達段階順に子どもが見せる姿を「キーワード」として整理し、そこに所蔵作品を当てはめていくという構想に基づく。例えば小学校低学年のキーワードのひとつは、ポーズをとるなどしてすぐに作品と一体化しようとする「身体性」であり、ロダンの「考える人」や高村光太郎の「手」が紐づけられている。キーワードは15種類。小学校低学年「身体性」「直感」「発見」、中学年「中に入る」「物語」「プロセス」、高学年「造形要素」「論理性」「昔の暮らし」、中学1年「内省」「日本の文化」「現代の社会」、中学2・3年「文化比較」「歴史と信仰」「美術という概念」である。

プログラム構築の設計図として作成した「鑑賞学習と発達の関連表」は、サイト内に掲示している。これは、学習指導要領や解説書、教科書等が基になっており、発達や学習課題と作品選択の関係性をとらえやすくしたものである。表の横軸には五つの発達段階

が、縦軸には「子どもの姿(発達の特性)」「鑑賞の方法」「学習課題」「キーワード」「用語」が、それぞれ並ぶ。

(図1)



サイトにアクセスすると、トップページに東京国立近代美術館(本館・工芸館)、国立西洋美術館、東京国立博物館の所蔵作品49点のアイコンが並び、学年やキーワードをクリックすると、作品アイコンが絞り込まれる(図1)。作品にはそれぞれ、解説や鑑賞ポイントとともに、実際のギャラリートーク事例やアクティビティ案、子どもの発言記録などが記されている。

特長として、時代・地域・技法などの分野の異なる所蔵作品を幅広くカバーできていること、各美術館で蓄積された鑑賞方法が作品ごとに紹介されていること、拡大に耐えうる高精細画像なので、近年普及が進む電子黒板やタブレット端末を活用して授業に活用できることが挙げられる。

#### (6) まとめと課題

研究の目的に挙げた、1)国内外の美術館調査、2)鑑賞教育プログラムの構築、3)研究成果の公開はすべて達することができた。特に、美術館のスクールプログラムと学習スタンダードとの関係に焦点を当てて海外調査を行えたことは収穫であり、開発したウェブ鑑賞プログラムに反映させることができた。今後は、次なる科研費研究「美術館の所蔵作品を活用した探求的な鑑賞教育プログラムの開発」(平成28~30年度基盤研究(B))にて、本プログラムへの参加美術館を拡大し、さらなる検証を重ねていきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計29件)

寺島 洋子、横山 佐紀、オーストラリアの美術館における教育活動、国立西洋美術館紀要、査読有、20巻、2016、20-38

室屋 泰三、美術館におけるデジタルア

ーカイブの利用、映像情報メディア学会誌、査読無、70巻、2016、160-164

一條 彰子、コレクションと鑑賞教育、現代の眼、査読無、613号、2015、14-16

奥村 高明、小学校教育における創造性の育成と各教科等における取組の視座、初等教育資料、査読無、937巻、2015、6-11

岡田 京子、図画工作科におけるICTを活用した学習指導、初等教育資料、査読無、927巻、2015、20-29

一條 彰子・大高 幸・岡田 京子・寺島 洋子、オーストラリアの美術館における鑑賞教育、日本美術教育研究論集、査読有、48巻、2015、109-120

一條 彰子・寺島 洋子、米国の美術館における鑑賞教育、日本美術教育研究論集、査読有、47巻、2014、1-12

奥村 高明・飛知和 朋子、テート美術館「アートへの扉」の検討(2)、日本美術教育研究論集、査読有、47号、2014、35-44

奥村 高明、言語活動の充実とは 中学校美術科、指導と評価(日本教育評価研究会) 査読無、710号、2014、24-16

今井 陽子、子どもと一緒に工芸鑑賞「もようわくわく」展、現代の眼、査読無、605号、2014、14-16

細谷 美宇、「こども美術館」参加者の過ごした時間から学ぶ、現代の眼、査読無、606号、2014、14-16

寺島 洋子、美術館における学校利用、博物館研究、査読無、540巻、2013、12-15

一條 彰子、米国の美術館教育リポート 学校教育へのアプローチ、現代の眼、査読無、602号、2013、10-11

一條 彰子、ドイツの博物館教育リポート、現代の眼、601号、2013、15-16

岡田 京子、表現と鑑賞の関連を図った授業づくりの具体的な視点、初等教育資料、査読無、906巻、2013、48-49

一條 彰子、「博物館における青少年教育」ドイツ派遣事業に参加して、全美フォーラム、査読無、3巻、2013、4-7

奥村 高明、テート美術館「アートへの扉」理論の検討(1) - 西洋美術館におけるギャラリートークの相互行為分析を通して、日本美術教育研究論集、査読有、46号、2013、21 - 28

上野 行一、対話による美術鑑賞教育の日本における受容について、帝京科学大学紀要、査読有、8号、2012、79 - 86

上野 行一、実技系教科授業における子どもの学びの体験 日本と韓国の小学校授業比較を通して、Korean Journal of Japan Education、査読有、17号、2012、213-229

奥村 高明、協同と個を同時に成立させる学びのデザイン、教育研究、査読無、67号、2012、18 - 20

〔学会発表〕(計 23 件)

奥村 高明、授業研究の実証性に関する体験的な問題提起、美術科教育学会、2016.3.20、大阪成蹊大学

室屋 泰三、絵画画像の色彩変化の離散的構造について、日本色彩学会、2016.2.27、国立新美術館

一條 彰子、寺島 洋子、所蔵作品を用いた米国・豪州の鑑賞教育事情、美術科教育学会、2015.3.28、上越教育大学

一條 彰子、奥村 高明、国立美術館・博物館の所蔵作品を用いた鑑賞教育の展開、2015.3.28、上越教育大学

奥村 高明、来館者が新しい価値を見出す空間としてのミュージアム、日本科学教育学会、2014.9.14、埼玉大学

一條 彰子・大高 幸・岡田 京子・寺島 洋子、Development Art Appreciation; Education Program in Art Museum in Japan, AGNSW Learning Symposium 2014, 2014.3.14, Art Gallery New South West, Sydney, Australia

一條 彰子・寺島 洋子、米国の美術館における鑑賞教育の今、日本美術教育研究発表会、2013.10.20、東京家政大学

奥村 高明・飛知和 朋子、テート美術館「アートへの扉」の検討(2)、日本美術教育研究発表会、2013.10.20、東京家政大学

岡田 京子、学習指導要領全面実施 2 年目の成果と課題、日本教育美術連合(招待講演) 2012.4、聖心女子大学

奥村 高明、テート美術館「アートへの扉」理論の検討(1) - 西洋美術館におけるギャラリートークの相互行為分析を通して、日本美術教育研究発表会、2012.10.14、東京家政大学

上野 行一、私の中の自由な美術、美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修(招待講演) 2012.7.31、東京国立近代美術館

一條 彰子、国立美術館が行う鑑賞教育研修、釜山文化財団・釜山大学校合同研修(招待講演) 2012.12.6、釜山芸術教育支援センター(韓国)

一條 彰子、美術を見ること、感じること 美術館を活用した鑑賞教育について、京都国立近代美術館との連携による鑑賞教育講座(招待講演) 2012.8.3、京都国立近代美術館

〔図書〕(計 10 件)

奥村 高明、エグゼクティブは美術館に集う 脳力を覚醒する美術鑑賞、光村図書出版、2015、192

寺島 洋子、大高 幸、端山 聡子、博物館教育論、放送大学教育振興会、2016、292

上野 行一、風神雷神はなぜ笑っているのか、光村図書、2014、296

上野 行一、五感で愉しむアート鑑賞、美術出版社、2014、96

奥村 高明・長田 謙一(監訳)、美術館活用術 鑑賞教育の手引きロンドン・テートギャラリー編、美術出版社、2012、124

〔その他〕

ホームページ等

「鑑賞教育.jp」<http://kanshokyoiku.jp/>、(鑑賞教育キーワード map、関係論文、シンポジウム・ワークショップ報告を掲載)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

一條 彰子 (ICHIJO AKIKO)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員

研究者番号：40321559

(2) 研究分担者

奥村 高明 (OKUMURA TAKAAKI)

聖徳大学児童学部・教授

研究者番号：80413904

- (3) 研究分担者  
岡田 京子 (OKADA KYOKO)  
国立教育政策研究所・教科調査官  
研究者番号：40615506
- (4) 研究分担者  
寺島 洋子 (TERASHIMA YOKO)  
独立行政法人国立美術館国立西洋美術館  
館・学芸課・主任研究員  
研究者番号：00270421
- (5) 研究分担者  
藤田 千織 (FUJITA CHIORI)  
独立行政法人国立博物館東京国立博物館  
館・教育普及室・主任研究員  
研究者番号：70419886
- (6) 研究分担者  
上野 行一 (UENO KOICHI)  
帝京科学大学・教授  
研究者番号：40284426
- (7) 研究分担者  
藤吉 祐子 (FUJIYOSHI YUKO)  
独立行政法人国立美術館国立国際美術館  
館・学芸課・主任研究員  
研究者番号：10393266
- (8) 研究分担者  
室屋 泰三 (MUROYA TAIZO)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術  
館・企画課・主任研究員  
研究者番号：30537329
- (9) 研究分担者  
今井 陽子 (IMAI YOKO)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術  
館・工芸課・主任研究員  
研究者番号：60290871
- (10) 研究分担者  
細谷 美宇 (HOSOYA MIU)  
独立行政法人国立美術館東京国立近代美術  
館・企画課・研究補佐員  
研究者番号：30639539